

旧宮良殿内板戸絵の現状と展望

Current Status and Future Prospect of Sugito-e in Miyaradunchi

喜屋武 千恵、平良 優季

Chie KYAN, Yuki TAIRA

旧宮良殿内板戸絵の現状と展望

喜屋武 千 恵、平 良 優 季

はじめに

本研究の目的は、旧宮良殿内板戸絵みやらどうんちの素材及び技法研究である。本研究の対象となる旧宮良殿内（以下、宮良殿内と略）板戸絵は、宮良殿内（国指定文化財）の建築装飾として八重山蔵元絵師が描いた板戸絵 5 枚のことをいう。

宮良殿内板戸絵は、失われてしまった円覚寺、中城御殿、崇元寺等において、かつて存在していた板絵を研究する上でも、それらを内包する琉球絵画を研究する上でも大変貴重な資料と言える。琉球絵画とは、琉球王国時代に描かれた絵画であるが、先の大戦や高温多湿の劣悪な環境等で多くの作品が失われており、極めて作品の数が少ない。また残存する作品においても、その保存状態が悪いなど、作品の保護についても課題は多い。近年、琉球絵画の研究が進み、様々なことが明らかになってきた。しかし、首里を中心とした貝摺奉行所の絵師らと比較して、先島の地方絵師である蔵元絵師については、まだ不明な点が多く、彼らによって描かれたとされる宮良殿内板戸絵についても、同様のことが言える。

以上の理由から、板戸絵の素材及び技法調査を行うことで、板戸絵の現状を明らかにしていきたいと考える。本研究ノートでは、2 回の熟覧調査（2019 年 1 月 24 日～26 日、2019 年 8 月 25 日～26 日）を踏まえて、現状と調査結果で明らかになったこと、史資料及び先行調査との比較を行い、それにつながる今後の展望をまとめていくこととする。

1. 蔵元絵師と宮良殿内板戸絵について

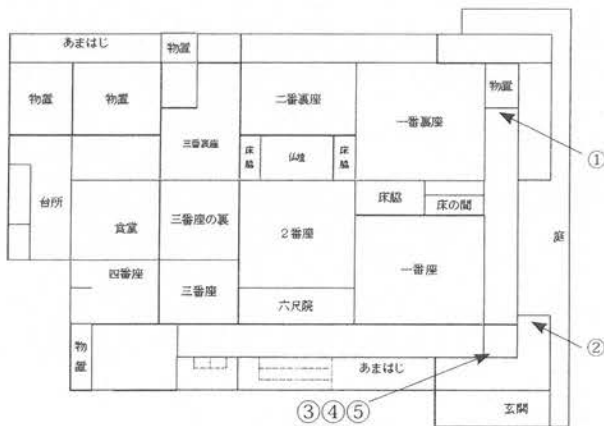
宮良殿内は、沖縄県石垣市にある琉球王国時代の私邸である。1819 年に松茂姓 8 世当演が、宮良間切の頭職に任命されたのを記念して建造されたと言われる。また 1972 年に国指定重要文化財（建造物）となっている。

殿内には、八重山蔵元絵師（以下、蔵元絵師と略）の「喜友名安信（外）」¹が描いたとされる板戸絵が 5 点残っている。蔵元絵師は、絵画技術といった特殊技能を持つものとして任命され、異国船が来た際の首里王府への報告資料として、船の形、外国人のスケッチ、通事に付き添い絵による会話の補助、地図の作成といった任務を行っていた。実際に蔵元絵師になるためには、蔵元政庁の試験において優秀な者のみが採用され、その中でもさらに優秀な者は、首里王府へと稽古のための研修派遣が設けられる等、当時、絵師に対して高い技術と重要な役割が求められていたことが分かる。鎌倉芳太郎が『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982 年）にも記したように、当時使用されていたとする絵具は現在においても高価で貴重な絵具が使用されており、絵具は全て福州から舶来のものが蔵元に収められていたと

されている²。以上を踏まえると、宮良殿内に描かれている板戸絵を研究することで、蔵元絵師の技術を垣間見ることができ、さらには首里王府、貝摺奉行所と蔵元絵師との関係性や師弟制度など、絵師を取り巻く当時の体制を考えることが出来、今後の研究資料として期待できる。

2. 宮良殿内板戸絵の現状について

宮良殿内は現状として劣化が著しいため、数年内の半解体修理が検討されている。同様に板絵の基底材である板戸の損傷も深刻である。そのため、今後現存する板戸絵を保護し、その代わりとなる模写を収めていくための熟覧を目的とし、素材及び技法の調査を進めていった。そこで、保護や模写に向けて他の専門分野からの意見交換や交流も兼ねて、八重山教育委員会文化財課の下野栄高氏、装演師の當間巧氏、沖縄県立博物館・美術館学芸員の篠原あかね氏、沖縄県立芸術大学後期博士課程に在籍する仁添まりな氏にも参加いただき、調査を行った。



▲図1 宮良殿内敷地配置図
宮良殿内配布資料「旧宮良殿内」を参考に作成

2-1 調査対象について

調査対象とする板戸絵の配置箇所は、以下の通りである（図1）。

【調査対象】

- ① 《鷹図》a…はめ込み型。
- ② 《鷹図》b…はめ込み型。
- ③ 《鷹図》c…裏面に④が描かれている。
- ④ 《鷹図》d…裏面に③が描かれている。
- ⑤ 《鍾馗図》…回転扉式。裏面は絵柄無し。

構図が異なる4種類の《鷹図》³と、《鍾馗図》⁴が描かれた板戸絵、計5枚を調査した。（以下、《鷹図》は作品名の後にa～dとつけて区別する。）

宮良殿内家人の宮良芳明氏によると、③～⑤の板戸絵は当時配されていた場所が分からないとのことで図1に示している箇所に重ねてたてかけられていた。板戸絵の詳細は、鎌倉資料⁵に記載されている内容や熟覧調査をもとに表1にまとめた。

表1 板戸絵一覧（鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）と熟覧調査をもとに作成）

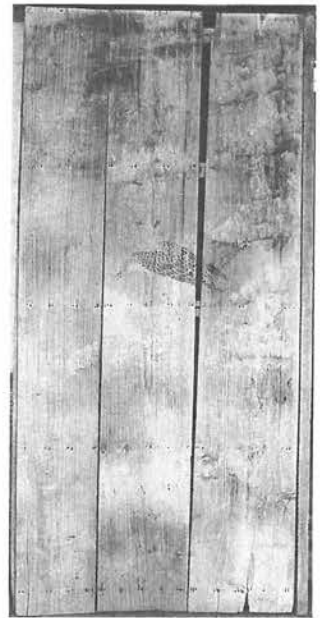
No.	作品名(鎌倉資料より)	作品名 (本研究ノートでの表記)	区別 アルファベット	作者 (鎌倉資料より)	彩色 (現状)	高さ(mm)	横(mm)
①	八重山宮良殿内杉板絵 鷹図	鷹図	a	喜友名安信(外)	有	1900	955
②	八重山宮良殿内杉板絵 鷹図	鷹図	b	喜友名安信(外)	有	1880	960
③	八重山宮良殿内杉板絵 鷹図	鷹図	c	喜友名安信(外)	有	1885	915
④	記載無し	鷹図	d	記載無し	無	1885	915
⑤	記載無し	鍾馗図		記載無し	有	1790	825



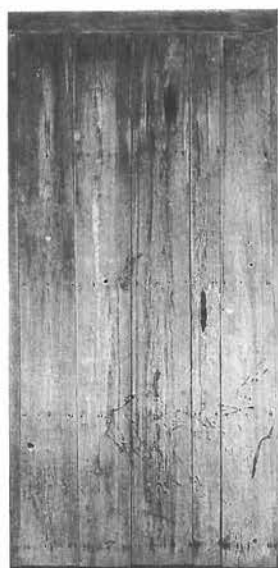
▲図2①《鷹図》a現状
はめ込み型。
彩色が施されている



▲図3②《鷹図》b現状
はめ込み型。
彩色が施されている。
板戸の前に展示ケースがあり、動
かせないため、画面右下の撮影は
叶わなかった。



▲図4③《鷹図》c現状
裏に《鷹図》dが描かれて
いる。彩色が施されて
いる。



▲図5④《鷹図》d現状
裏に《鷹図》cが描かれている。
彩色は無し。



▲図6⑤《鍾馗図》現状
回転軸が画面左の上下についており、
回転扉仕立てになっている。彩色あり。

2-2 調査方法について

熟覧調査を第1回2019年1月24～26日、第2回2019年8月25日～26日の計2回に分けて、次の5つの手法で調査を行なった。

- (1) 鎌倉資料との比較…鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）に掲載されている宮良殿内の板戸絵3枚の写真と現状との比較。
- (2) 目視による調査…目視で分かる範囲で、板戸絵の状態（亀裂・剥落など）、線描・画材等を調査。
- (3) 紫外線ライト…白い絵具部分に照射し、胡粉か鉛白かを調べる。鉛白であれば照射部分はさらに白く反射する。ただし、簡易的な調査方法であるため、今後化学分析を用いて絵具を特定する必要がある。なお作品の劣化につながるため長時間の照射は行っていない。
- (4) 赤外線カメラ…絵具に埋没した下絵の墨線の調査を行う。
- (5) マイクロスコープ…絵具が用いられている箇所を拡大し、粒子の有無を確認する。岩絵具か染料系の絵具かを調査する。

2-3 現状について

調査の結果から、現状を（1）鎌倉資料との比較、（2）板戸の状態、（3）線描について、（4）使用画材についての4項目に分けると、以下のようにまとめられる。

(1) 鎌倉資料との比較

鎌倉芳太郎の撮影したガラス乾板には《鷹図》a、《鷹図》b、《鷹図》cの3点が掲載されていた。以下は、現状との比較である。



▲図7《鷹図》(鎌倉芳太郎撮影)
沖縄県立芸術大学附属図書・
芸術資料館所蔵



▲図8《鷹図》a部分図 現状
画面下部



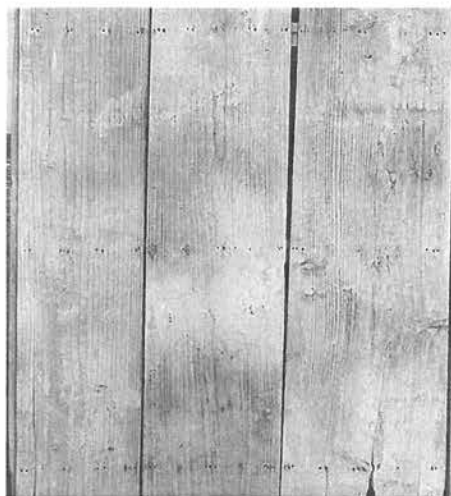
▲図9《鷹図》(鎌倉芳太郎撮影)、
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵



▲図10《鷹図》b部分図 現状
画面上部。



▲図11《鷹図》(鎌倉芳太郎撮影)、
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵



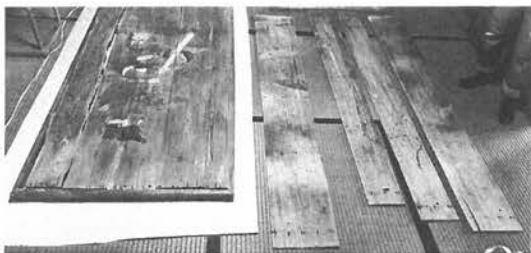
▲図12《鷹図》c部分図 現状
画面下部。

鎌倉資料と比較すると、明らかに剥落が進行しているのが分かる。図9と図11の板戸絵に関しては、現在の板戸と比較すると画面上部に描かれた枝(図10)や、岩や植物と思われる部分がほとんど消失している(図12)。

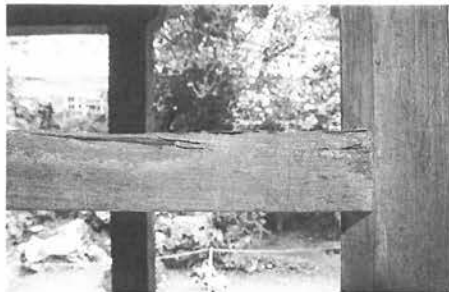
(2) 板戸の状態

板戸の状態については、目視による調査を中心に行った。画面上に打ち込まれた鉄釘が、錆により膨張したことで劣化が進み、今では板戸の枠を割いて破損し、原型をとどめていない(図13)。

また、《鷹図》bと《鷹図》cの板戸の枠はシロアリの被害が見られた(図14)。他にも枠組みの破損(図15)や浮き(図16)が多く見られた。



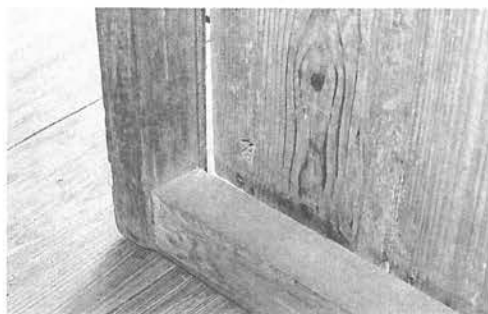
▲図13 現状
左から《鍾馗図》、《鷹図》b、《鷹図》c。劣化により板戸の枠から外れた為、床に寝かせている様子。



▲図14 現状
《鷹図》b、《鷹図》cの板戸の枠。シロアリに食われた跡が所々残っている。



▲図15 現状
《鷹図》b、《鷹図》cの板戸の枠。鉄釘が錆により膨張し、木枠が破損している。



▲図16 現状
《鍾馗図》の裏。板戸絵の板と木枠が外れ浮いている。

(3) 線描について

板戸に描かれている墨線の筆遣いや色材について、目視や赤外線撮影による調査を行った。赤外線ライトは、以下の機材を用いて撮影を行った。

赤外線カメラ：SONY F-828、レンズフィルター：KenKo R72

まず線描に注目していくと《鷹図》a(図2)、《鷹図》b(図3)、《鷹図》c(図4)の3点は、鷹や岩、草花を見ると、筆遣いと色材、色使い共に類似点が多く見られた。制作者も同一と考えられる。しかし、《鷹図》d(図5)は、他の4枚と線描が明らかに異なる。

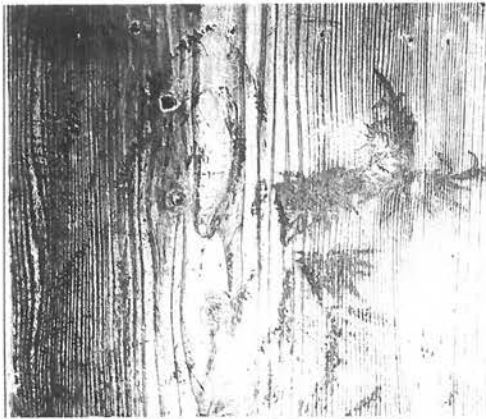
例えば鷹の描法に視点を当てて見てみると《鷹図》a、《鷹図》b、《鷹図》cともに鷹の羽の模様を意識した線描である。それに対し《鷹図》dは、他の4枚と線描が明らかに異なり、線の抑揚や勢い、筆の入り、抜きといった力加減等から、鷹の造形的な部分を意識した筆遣いであり、熟練した制作者によるものと思われる。《鷹図》bの鷹の顔(図17)と《鷹図》dの鷹の顔(図18)を比較しても、違いは明らかである。また、岩の線描においても同様のことが指摘できる。



▲図17 《鷹図》b部分図



▲図18 《鷹図》d部分図 赤外線撮影



▲図19《鷹図》a部分図 赤外線撮影



▲図20《鷹図》d部分図 赤外線撮影

《鷹図》a(図19)と《鷹図》d(図20)を比較しても、違いが明らかである。《鷹図》a(図19)が、岩のゴツゴツした肌質を意識したタッチで表現しているのに対し、《鷹図》d(図20)は、岩の手前・奥といった造形、そして岩の力強さを意識した筆遣いである。この2点を見ても、明らかに制作者が異なることが考えられる。

(4) 使用されている絵具について

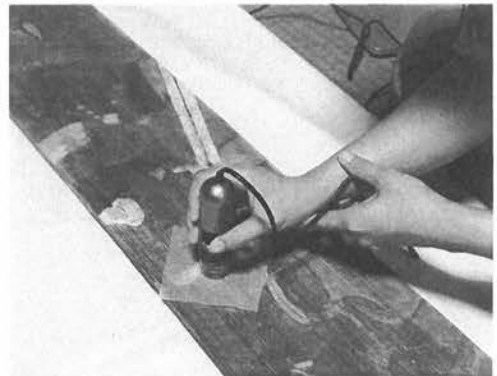
板戸絵に使用されている絵具を検討していくにあたり、目視と紫外線ライト、マイクロスコープを用いて調査を行った。使用した機材の詳細は、次の通りである。

電子顕微鏡(マイクロスコープ)：Dino-Lite Pro2(型番：DINOAD413TAI2V)

目視では、墨、緑青、2種類の白い絵具、茶系の絵具、青系の絵具が識別できた。白い絵具は鉛白か胡粉の可能性が高い。その判断として、紫外線ライトを当て、白く反射する箇所が鉛白である可能性が高く、《鷹図》a～cの鷹の胸部分や《鍾馗図》の剣、白目部分はその反応を示した(図21、図23、図24)。



▲図21《鍾馗図》部分
紫外線ライトをあけると、白目部分が白く反射。

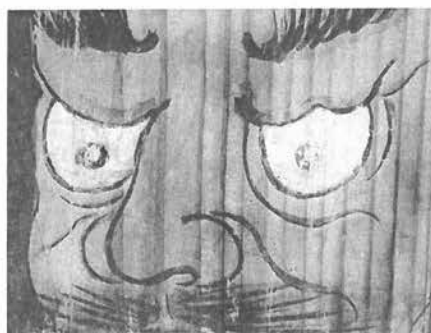


▲図22《鍾馗図》撮影風景
彩色が見られる箇所を中心に、マイクロスコープで撮影を行った。

また、目視では断定できない絵具の箇所を、顕微鏡を用いて粒子の有無を確認した(図22)。粒子が確認できたのは、《鷹図》cの松の葉部分と《鍾馗図》のベルト(図25、図26)、冠(図27、図28)、剣の柄部分である。これらの結果から、図26は群青、図28は緑青と考えられる。加えて、《鷹図》aの紅葉と《鍾馗図》の人肌に使用されていた茶系の絵具や、《鍾馗図》の着物に用いられていた青緑系の絵具からは粒子が確認できなかったため、それぞれ染料系の絵具が用いられていることが考えられる。同じく《鍾馗図》の剣の柄に付いている房は、胡粉と思われる白い絵具が下地として塗られ⁶、その上に粒子のない赤い絵具が塗布されていた。鎌倉が喜友名安宣から聞き取りを行った際に上げられていた絵具と照らし合わせると、恐らく朱だと考えられるが⁷、絵具を断定するには、今後、化学分析も含めて再度調査を行う必要がある。現状として、今回の調査で判別できた絵具は表2の通りである。

表2 使用されている絵具(目視・紫外線・顕微鏡の調査から)

No.	作品名(鎌倉資料より)	作品名 (本研究ノートでの表記)	区別 アルファベット	使用されている絵具
①	八重山宮良殿内杉板絵 鷹図	鷹図	a	墨、胡粉、茶系の染料、鉛白?、朱?
②	八重山宮良殿内杉板絵 鷹図	鷹図	b	墨、胡粉、鉛白?、朱?
③	八重山宮良殿内杉板絵 鷹図	鷹図	c	墨、胡粉、緑青、鉛白?、朱?
④	記載無し	鷹図	d	墨
⑤	記載無し	鍾馗図		墨、胡粉、緑青、群青、鉛白?、朱?、茶系の染料、青緑系の染料



▲図23 《鍾馗図》部分図
鍾馗の白目部分を撮影。



▲図24 顕微鏡撮影箇所A(×39倍)



▲図25 《鍾馗図》部分図
鍾馗のベルト部分を撮影。



▲図26 顕微鏡撮影箇所B(×39倍)
青系の粒子があるのが確認できた。

3. 調査結果から

今回の調査から、3点のことが明らかになった。まず1点目は、板戸絵に使用されている絵具が、緑青や群青といった、天然の岩絵具が使用されていたことである。今後化学分析を用いて、他の絵具も特定していく必要があるが、現在分かっている段階でも、贅を尽くして本板戸絵が描かれていることが分かった。

2点目は、板戸絵の作家が異なるという点である。当初、板戸絵は全て同一の絵師が手掛けたものであると考えていたが、今回の調査により《鷹図》a～cの作家と《鷹図》dの作家が異なることが指摘できた。《鷹図》dに関しては先述したように、熟練された作家であると考察した。これを喜友名安信（以下、安信と略）とし、《鷹図》a～cを随行した作家とする見解もある。しかし、《鷹図》a（図29）の葉の筆法、茎を薄墨で塗る行為は、安信の表現に類似する（図30）。加えて岩の表現も、《鷹図》d（図20）の筆遣いと安信の岩（図30）の筆遣いとは明らかに異なる。これらのことから、《鷹図》a～cの作者は、鎌倉の資料にもあるように安信と考えられる。そして《鷹図》dは、他の支持体と比較すると損傷が著しいことや絵具が確認できず墨線のみで描かれている。また筆の入りや抜きといった線の抑揚から、線に対する意識は中国画の影響が強く見られる。そのみならず、中国画の筆法について、ある程度修練を積んだものであると推測される。これらのことから、安信の師である毛文達（小波蔵安章）（1838-1886）か、その師となる毛長禧（佐渡山安健）（1806-1865）や権現堂の内陣扉絵の制作に携わった大浜仁屋（善繫）（1761-1814）という説も考えられる。これらのモチーフの捉え方に類似する作品として、毛長禧の《牡丹尾長鳥図》と《鷹雀枯木芙蓉図》があげられる。図31は《牡丹尾長鳥図》を左右反転させた部分図である。宮良殿内板戸絵の図20に描かれている岩の奥行きは描かれていないが、筆の強弱や苔の入り、岩のフォルム等は類似する部分が多い。また図32は、《鷹雀枯木芙蓉図》を同じく左右反転させた部分図である。図18と比較して、鷹の目尻や嘴の形の描き方から、鷹の顔の構造を意識した筆遣いとなっていることが共通している。

また《鍾馗図》に関しても、同じく安信が描いたことも考えられる。しかし、比較的他の4枚より保存状態が良いことや色材が豊富に使用されていること、鎌倉資料に写真の記録が残っていないことから、4枚以降に描かれた可能性も考えられるが、まだその特定に至っていない。

以上のことから、先述した絵師が描いた可能性も含めて、今後残された作品を元に検討していく必要はあるが、中国画の筆法についてある程度修練を積んだ者、あるいは首里王府貝摺奉行所の絵師に通じる技術を持った絵師が、この宮良殿内板戸絵の制作に関与していたことが明らかになった。



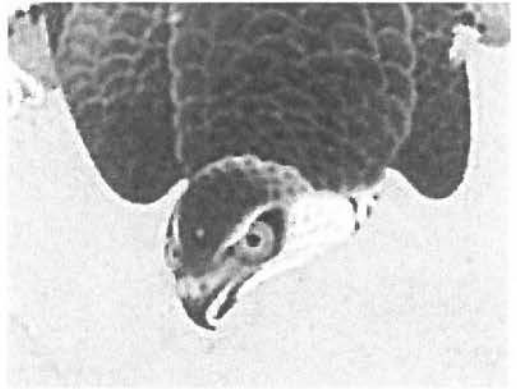
▲図 29 《鷹図》a 部分図 赤外線撮影



▲図 30 喜友名安信《牡丹図》部分図
(『八重山蔵元絵師画稿集』石垣市八重山博物館、1993年、1頁より)



▲図 31 毛長禧《牡丹尾長鳥図》反転部分図
(一般社団法人 美ら島財団所蔵)



▲図 32 毛長禧《鷹雀枯木芙蓉図》反転部分図
(一般社団法人 美ら島財団所蔵)

最後に、調査を行い明らかになったのは、板戸絵の損傷が危機的状況であるということである。板戸絵に打ち込まれた鉄釘の錆により膨張し、板戸を割いていた。そのため、板戸の木枠が折れていたことや、絵は木枠から外れ、バラバラになってしまっていた。1回目の調査の際は、板戸の状態を保っていたが、2回目の調査ではさらに劣化が進んでいた。2回目の熟覧に同行いただいた装飾師の當間氏によると、鉄釘を外して膨張を止めないと、さらに劣化が進んでしまうとの指摘があった。しかし、今回の調査を機に、これまで立てかけて保管していた板戸絵3枚については、保護の為の簡易的な処置として、當間氏のアドバイスを受け、棚を作成し宮良殿内内の一室に平置き保管する事となった。

今回の熟覧調査結果から、宮良殿内板戸絵は首里王府、貝摺奉行所との関係性や師弟制度

を見ていく上でも、また使用されている色材や基底材、技法についてもさらに分析していくことで、琉球絵画の一端を知る、重要な作品となる可能性があることが分かった。しかし、現状として状態が悪く、早急な保護が求められる。今後、模写を行うことで、当時の絵師達が制作を行う際の視点や工程を読み解くことができると考える。例えば、接着材として使用する膠の濃度や絵具の扱い方、墨線から判断出来る墨の含み具合、筆遣い。筆法など目視では判断しにくい技法を分析することが出来る。さらに、模写作品（レプリカ）をオリジナルの代わりに展示することで、貴重なオリジナル作品を、環境の良い場所に移動保管することが可能となる。

終わりに

冒頭にも述べたように、本研究の目的は宮良殿内板戸絵の素材及び技法研究である。今回の調査で鎌倉写真やノート等との比較、目視による状態調査、マイクロスコープ等の機材を用いた素材及び技法調査を行った。首里を中心とした貝摺奉行所の絵師等と比較した際、蔵元絵師については不明瞭な点が多々あった。それらを明らかにしていく上でも、宮良殿内の板戸絵調査は新たな絵師の存在、贅を尽された絵具の使用、保護への課題を浮き彫りにした。

展望として、絵師の特定はもちろんだが、半解体修理のことも鑑みて、板戸絵の保護とそれに代わる現状模写を描き留めることが必要である。宮良殿内板戸絵から、失われてしまった円覚寺や中城御殿にかつて描かれていた板戸絵を研究していく上での新たな展開が期待できると考える。今回の熟覧調査では、それらの意見交換を、家人の宮良氏をはじめとする各専門分野の方々と行うことができた。

今後、板戸絵を保護し、模写を通しての技法及び作家研究の側面からもさらに深めていきたい。

註

- 1 鎌倉の聞き取りなどから、喜友名安信（外）の（外）は、随行した作家もいたということを示している（鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝 写真』岩波書店、1982年、215頁）。
- 2 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年、214頁
- 3 本研究ノートでは、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）の表記に合わせて《鷹図》としているが、「この宮良殿内の鷹の絵は鷲の画とも思う。」（鎌倉芳太郎「琉球絵画の系譜」『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年、215頁）という表記もあるため、今後、検討していく必要がある。
- 4 諸説あるが、沖縄県教育庁文化課編『県内絵画遺品調査報告書 沖縄県文化財調査報告書 第十一集』（沖縄県教育委員会、1978年、73頁）では、《関羽の像》と記載されているが、大浜善繁《松下鍾馗図》や中城御殿の《騎獅鍾馗図》の衣装や剣、風貌などの類似点が多いことから、本研究では関羽ではなく《鍾馗図》と表記することとする。

- 5 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝 写真』岩波書店、1982年、299～301頁
- 6 鎌倉は八重山調査の際に権現堂の色材について、鎌倉ノートにまとめている。その中で胡粉を下地にし、上から絵具を塗り重ねているとする記述があることから、同様の技法が用いられていることが指摘できる。(『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)第四巻 雑纂篇』沖縄県立芸術大学附属研究所、2016年、79頁)
- 7 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年、214頁

参考文献

- 石垣市教育委員会編『石垣市の文化財』石垣市教育委員会、2014年
- 石垣市八重山博物館編『特別企画 久場島清輝展』石垣市八重山博物館、1990年
- 石垣市八重山博物館編『八重山蔵元絵師画稿集』石垣市八重山博物館、1993年
- 沖縄県教育庁文化課編『沖縄県文化財調査報告書 第十一集 昭和五十二年度 重要歴史資料調査 県内絵画遺品調査報告書』沖縄県教育委員会、1978年
- 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年
- 鎌倉芳太郎「先嶋藝術と桃林寺の印象」『八重山文化』第二号、八重山文化研究会、1974年12月、4～35頁
- 久貝典子「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査(上)」『沖縄文化』第96号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2003年3月、1～39頁
- 久貝典子「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査(下)」『沖縄文化』第97号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2004年3月、87～112頁
- 久貝典子「鎌倉ノートからみた「琉球芸術調査」」『沖縄芸術の科学』第27号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2015年3月、63～95頁
- 謝花佐和子・仲里なぎさ編『麗しき琉球の記録－鎌倉芳太郎が発見した美－』沖縄文化の杜、2014年
- 東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編『図解 日本画の伝統と継承－素材・模写・修復－』東京美術、2002年
- 波照間永吉・麻生伸一編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)第四巻 雑纂篇』沖縄県立芸術大学附属研究所、2016年
- 原田あゆみ「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学』第11号、沖縄県立芸術大学附属研究所、1999年、25～137頁
- 宮城篤正「県内絵画遺品調査報告」『沖縄県立博物館紀要』第5号、沖縄県立博物館、1979年、17～38頁
- 与那原恵『首里城への坂道 鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』筑摩書房、2013年

謝辞

本研究は、宇流麻学術研究助成基金からの助成金によって遂行されました。また、熟覧調査にあたり、宮良殿内家人の宮良芳明氏はじめ、宮良芳和氏、宮良安則氏、石垣市教育委員会の下野栄高氏、八重山博物館、また本研究を行うにあたり、當間巧氏、篠原あかね氏、一般社団法人 美ら島財団のみなさまには、貴重な資料の閲覧とご提供、ご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

Abstract

Current Status and Future Prospect of Sugito-e in Miyaradunchi

Chie KYAN, Yuki TAIRA

The target of the study is the Sugito-e (painting on cedar-board doors) in Miyaradunchi (a designated national treasure in Japan), which is extremely rare nowadays.

Results of reference researches and interviews both shows that the supports of the Sugito-e are seriously damaged and drawings on the Sugito-e are peeling off, which once again reveals the risk of disappearance. Considering the current endangered aging and peeling issues, immediate preservation is vitally important.

The Sugito-e in Miyaradunchi was based on studies on the extinct ones in Enkakuji, Nakagusuku-udun, Sogenji that could depict the studies of Sugito-e drawing of the former Ryukyu artists. Thus, it is a very important item indeed.

As for further studies, it would be great if experts could join in and start investigation and historical verification, along with the construction of restoration model based on the comparison with information about Kamakura, all for further chemical analysis of the involved drawing materials based on the results attained this time. It would be great if investigation could go on so as to bring a closes picture of the Sugito-e drawing at the time when they were created.